

平成 30 年 9 月 3 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13159

研究課題名(和文)『ドイツ・イデオロギー』のオーサーシップに関する実証的研究

研究課題名(英文)An empirical study on the authorship of "The German Ideology"

研究代表者

窪 俊一 (Kubo, Shunichi)

東北大学・情報科学研究科・准教授

研究者番号：50161659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、マルクスあるいはエンゲルスのいずれがイニシアティブを取り、『ドイツ・イデオロギー』フイエルバッハ章の草稿を作成したのが、また、史的唯物論のオリジナリティの所在如何、という未解決の問題に、文献学的・編纂学的な観点からアプローチし、最終的解答を与えようとするものである。

草稿オリジナルと解読原稿とを厳密に照合比較することで、書体はエンゲルスのものだが、膨大な即時異文はマルクスに由来すると推断する他なく、結局、この部分はマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したのであり、草稿同章の作成でイニシアティブをとったのはマルクスだという推測が成り立つことを確認した。

研究成果の概要(英文)：This study is a philological and empirical attempt to give the final answer to the authorship problem: which writer, Marx or Engels, should be regarded as the main author of the "Feuerbach" chapter in "The German Ideology" and thus as the founder of historical materialism.

Comparing and examining the original manuscripts/the text and the handwriting peculiarities of Marx and Engels, especially immediate variants, we can't exclude the possibility that Engels's writings were dictated by Marx. The initiative was with Marx, not Engels.

研究分野：メディア情報学

キーワード：ドイツ・イデオロギー オーサーシップ 編纂学 文献学 社会思想史

## 1. 研究開始当初の背景

マルクス/エンゲルスの独自の歴史観である史的唯物論の主要命題が最初に登場するのは『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォエルバッハ」(1845 - 1846)においてである。同章草稿の全文がオリジナル言語のドイツ語で公表されたのは草稿成立 80 年後の1926 年であった。以来約 90 年の間に数多の研究が国内外でなされたが、未だにそもそもこの草稿作成でイニシアティブをとったのはマルクス/エンゲルスのいずれか、という問題、同じことであるが、史的唯物論の眞の生みの親はマルクス/エンゲルスのいずれかについて、確定的な結論が出ていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、新 MEGA(Marx-Engels-Gesamtausgabe) 及び草稿オリジナルに関する最新の知見に立脚して、こうした国内外の研究史上未解決の難問に最終的な回答を与えようと試みるものである。

『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォエルバッハ」の草稿基底稿(一番最初の段階に書かれたテキスト:「テキスト最下層」)に残存するマルクスの筆跡は少なく、多くはエンゲルスのものである。筆跡による限り、草稿同章の著者 = 史的唯物論の創始者はエンゲルスと目される。しかし、マルクス没後エンゲルスが『共産党宣言』の序文等で、史的唯物論の創始者はマルクスであることを再三言明したことから、草稿同章の著者は、マルクス/エンゲルスの2人に帰されることが多かった。早くも1920年にGustav Mayerはマルクスの悪筆に比べてエンゲルスは読み易い書体だったので、2人は事前に話し合い、成果をエンゲルスが紙上に移したと述べた。しかし異論もあった。1926年にDavid Rjazanovは第1章を初めてドイツ語で公表した際、折衷案を提示し、第1章前半はマルクス口述・エンゲルス筆記、同章後半はエンゲ

ルス単独執筆と述べた。後年廣松渉がこの異論を取り上げ、第1章の基底稿がエンゲルスの筆跡なら、草稿同章執筆のイニシアティブはエンゲルスであり、史的唯物論の主導者はエンゲルスだと述べた(1964年)。欧米ではともかく、廣松の見解はアジア特に日中韓3国では非常に大きい影響力がある。我々は『ドイツ・イデオロギー』を収録する新MEGA 1/5の編集者と協力して第1章草稿のオリジナル画像とテキスト異文の詳細かつ厳密な比較検討を行い、Rjazanovがエンゲルスの単独筆記と推認し、これを最大のよりどころに廣松が同章全体のエンゲルス執筆主導説を提唱することになった草稿同章の後半で、この部分がマルクスの口述筆記であることを如実に示す即時異文(書きさし、書き損じなど、詳細は後述)を多数発見した。

本研究の最大の目的は、『ドイツ・イデオロギー』第1章草稿全体がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したことを、草稿の異文、特にセンテンスが成立する途上で生まれる即時異文の特質解明から客観的かつ科学的に解明するところにある。研究史上顧みられることがなかった草稿の即時異文に示されるマルクス/エンゲルスの書き癖に着眼し、『ドイツ・イデオロギー』第1章のマルクス口述・エンゲルス筆記説を単なるテキスト解釈の問題としてではなく、統計学的手法でデータ解析を行い、結論を経験科学の観点から確定するところにある。

『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォエルバッハ」草稿の眞の著者はマルクス/エンゲルスのいずれか、というオーサーシップの問題は、100年近い研究史をもち、その問題の最終解決を目指すこと自体がチャレンジ性に富む。この問題に対するアプローチの仕方は、内外の研究史で一度も試みられたことがないものである。新旧両MEGAがMEW(Marx-Engels-Werke)等の学習版と区別されるのは、膨大な注記や索引のほか、テキ

スト成立に特別の配慮をしていることである。草稿執筆では最終テキストに至るまでにさまざまな異文が生まれる。特に新 MEGA (1975~) は旧 MEGA (1927~1935) にはなかった異文の内部区分を行った。すなわちセンテンスが確定する途上、すなわち基底稿テキストの生成途上で生じる即時異文と、センテンスが確定した後、その推敲過程で生まれる後刻異文である。後刻異文は基底稿テキストが存在するので、第三者が介入することも可能だが、即時異文は、著者が途中で執筆を中断するか、方向転換を図ることで初めて生じ、著者自身の書き癖に由来する異文である。著者が予め頭の中で反芻して文章を確定してから思考を紙上に移す(執筆する)場合、即時異文の数量は少ない。著者が紙の上で考える、すなわち書いては消し消しては書く場合、即時異文の数は多くなる。前者の典型がエンゲルスであり、後者の典型がマルクスである。申請者らはまずこのことを確認し、『ドイツ・イデオロギー』執筆直前のエンゲルスの単独稿(新 MEGA I/3)と『経済学=哲学手稿』(新 MEGA I/2)に代表されるマルクス単独稿を比べると、後者の即時異文が遙かに多数に達することを知った。『ドイツ・イデオロギー』第 1 章草稿はどうか。『経済学=哲学手稿』のマルクスよりもさらに多いのである。この事実は Mayer の共同執筆説や廣松のエンゲルス単独執筆説によっては説明できない。Mayer の共同執筆説はマルクス/エンゲルスの議論の結果を紙上に移したのはエンゲルスであった、ということなので、少なくとも草稿同章執筆のイニシアティブはエンゲルスであった。ところが Rjazanov がはつきりエンゲルスの単独稿だと言った草稿第 1 章後半でさえ、即時異文は 400 箇所を超えるが、総計すれば同程度の長さになるエンゲルス単独稿 3 点に含まれる即時異文は 80 箇所にも満たない。さらに複数の同音異義語の即時異文も存在する。これらは草稿同章前半でも

同じであり、廣松説(これは Rjazanov 説の一半でもある)に対して、また Mayer のエンゲルス主導の共同執筆説に根本的な疑問を投げかける。即時異文の本性に照らすと、両説が成り立つには数百箇所の即時異文が単なるミス(偶然)によるものであり、同音異義語も同様である、ということが合理的に説明されなければならない。しかしそれは不可能である。これを説明できるのは口述筆記だけである。元々マルクスは即時異文が多い書き癖があり、口述筆記の場合聞き手の側での聞き漏らしや、同音異義語の筆記ミス、それに訂正の際の意見交換に基づく誤りが加わるのが当然だからである。

新 MEGA に草稿テキストの異文一覧が収録されたことで、異文研究の前提が整備されたが、こうした異文情報、特に即時異文の解析をメインにした研究は今まで内外共に皆無である。本研究は即時異文情報を『ドイツ・イデオロギー』第 1 章草稿の執筆者の著者同定に用いたことに眼目がある。また、本研究では、草稿画像の解析を行うことによって、das(定冠詞)と daß(接続詞)との、また daß(接続詞)と das(関係代名詞)の混同をはじめ、ドイツ人ならまず犯さない同音異義語のミスをいくつか発見している。この種のミスは草稿同章を新 MEGA の判型で先行出版した *Marx-Engels- Jahrbuch* 2003 年版には記録されていなかった。

### 3. 研究の方法

『ドイツ・イデオロギー』第 1 章における即時異文箇所(削除箇所)を抽出し、基底稿への組み入れ作業を行った。具体的には、草稿オリジナルと解読原稿とを厳密に照合比較することで、草稿前半部の即時異文数を確定し一覧表記し、一覧表記した即時異文の中の同音異義語の書き損じの有無の検討、多数の定冠詞、不定冠詞の置換及び削除例の存在の確認、直ちに復活する削除訂正の

存在の確認を行った。

新 MEGA のアパレート巻の異文一覧では、即時異文はテキスト巻のテキストの一部と結びつけ即時異文が表記されている。例えば、„55.25 | Völker, <Kri[ege]> / “ 等である。ここで最初の数字と文字「55.25 |」は新 MEGA (この場合は前記先行版) テキスト巻の 55 ページ、25 行目、左欄を意味し、Völker, <Kri> は、テキスト巻で当該箇所のテキスト、「Völker, 」に続いて草稿では、「Kri[ege]」(諸々の戦争)と書かれ、この書きさしが削除され執筆が中断していることを意味する(「<>」は削除、「/」は中断を示す)。ではこの中断は何故生じたのか。これは一覧を見るだけでは全く分からない。テキスト巻の当該箇所に削除された「Kri[ege]」を埋め込むと...Völker, **Kri** selbst gewöhnliche **Kriege**, ...となり、この「Kri[ege]」は selbst gewöhnliche (そもそも通常の) という修飾語が加わったことで、いったん削除されて復活していることが分かる。„55.33 | wenig <eine ausgebildete> / “ は先行版 55 ページ 33 行目左欄の wenig 直後の <eine ausgebildete> (一つの成熟した) が即時異文で、ここで執筆が中断していることを意味する。この執筆中断は何故生じたのか? 上と同様の参照を行うと、...wenig **eine** ausgebildete **Produktivkräfte**... (...[いかに]成熟した生産諸力が...) となっていたことが分かる。つまり最初は Produktivkräfte (生産諸力) を単数形にする予定であったが、複数形にしたため、eine (一つの) を削除したのである。この削除は単数形の Produktivkraft ではなく、Produktivkräfte としたとき初めて必要となったので、新 MEGA 編集者は即時異文の範囲を実際に削除された eine だけに止めず、ausgebildete までとしたのである。こうした 2 つの事例が端的に示すように、新 MEGA の異文一覧を見るだけでは、中断が何故生じ、実際に削除された単

語が何かは不分明である。これを明らかにするには、新 MEGA アパレート巻の異文一覧を逐一テキスト巻当該箇所と対比する必要がある。言葉を換えれば、新 MEGA の異文一覧に掲げられている即時異文から、実際に削除された要素(文言)を抽出し、基底稿に組み入れることで、即時異文が生じた理由や特質が明確になる。そこで本研究では、この明確化をはかるために、即時異文で最終テキストには残らなかった(削除された)要素を基底稿に組み入れたテキストを作成した。異文一覧には後刻異文がピンポイントで収録されている。その種類は置換、削除、挿入、語順変更である。置換部分は置換前に、削除箇所は復活、挿入箇所は削除、語順変更は元に戻す、この編集を行うと基底稿が現れるので、この基底稿に上記即時異文で削除された要素を組み入れると必要なテキストを編集できる。本研究では、この基底稿に即時異文を組み入れたテキストの作成作業を行った。

草稿同章の即時異文削除箇所には顕著な事例として、定冠詞や不定冠詞を途中で変更する事例やいったん削除した単語が削除箇所から余り隔たりのない本文テキストで復活する事例(前者の 1 例が先に見た eine の削除で後者の 1 例が Kri[ege] の削除である)が多数ある。これはエンゲルス単独稿には殆ど見られないが、マルクスの『経済学=哲学手稿』には随所に見られる。

#### 4. 研究成果

これらの分析を通じて、書体はエンゲルスのものだが、膨大な即時異文はマルクスに由来すると推断する他なく、結局、この部分はマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したのであり、草稿同章の作成でイニシアティブをとったのはマルクスだという推測が成り立つことを確認した。

## 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

[ 雑誌論文 ] ( 計 2 件 )

Izumi Omura: Re-examining the Authorship of the “Feuerbach” Chapter in The German Ideology on the Basis of a Hypothesis of Dictation, *Marxism* 21, 第 15 巻, pp.101-135, 2018 年 \* 査読有  
韓国語

大村泉 : 口述筆記説にもとづく『ドイツ・イデオロギー』I.Feuerbach のオーサーシップ再考、マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究、第 59 巻、pp.15-50、2017 年 \* 査読有

[ 学会発表 ] ( 計 1 件 )

Izumi Omura: Re-examining the authorship of the “Feuerbach” chapter in The German Ideology on the basis of a hypothesis of dictation. *Marx 1818 / 2018. New developments on Karl Marx’s thought and writings*, Lyon (France), 27-29 September 2017.

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

窪 俊一 (KUBO, Shunichi)  
東北大学・情報科学研究科・准教授  
研究者番号 : 50161659

### (2) 研究分担者

大村 泉 (OMURA, Izumi)  
東北大学・経済学研究科・名誉教授  
研究者番号 : 50137395